



セブ島でのボランティア活動



私は大学に入学してから、言語の壁を少しでも減らせるようにとアゼリアに通い始めて、4年目の大学4年生です。大学3年生の春、観光目的で姉とセブ島を訪れ、タクシーで移動中に車内から見たセブ島のスラム街、街中で小中学生くらいの少女、少年たちが物売りをしていたことに衝撃を受けました。日本ではありえない光景に、彼らのために何かできることをしに必ず戻ってこようと決め、約1年後の今年の夏休みにグローリアセブという国際ボランティア団体に参加しました。この団体は特に

年齢制限もなく、高校生や大学生が主にボランティアとして活動しています。フィリピンの公用語はタガログ語で、現地の人と触れ合うときは主に英語を用いますが、アゼリアで英会話を受けていたため、海外で活動することに不安を持つことなく参加できました。

セブ島に対して、リゾートのイメージを持つ多くの日本人がいますが、実際には貧富差が大きく、2人に1人が貧困層だといわれています。ボランティア活動の内容としては、山岳地域の貧困地区を訪問し、子供たちと交流したり、家庭訪問、スラム街やゴミ山、山の集落や学校で食事配給活動をしたりと滞在日数は7日ですが様々な活動をしました。中でも貧困地区での家庭訪問とゴミ山で、見たこと、感じたことが強く印象に残っています。



家庭訪問では二軒のお宅を訪問し、そこでいくつか質問ができるのですが、「あなたは今幸せですか？」という質問に、笑顔で「幸せよ。お金はないけど、いつも幸せを感じているわ」と答えました。このお宅は8人で暮らしていますが、日本円で約600円で1か月生活をしているお宅でした。ここで、お金があれば幸せだということは一概に言えないこと、

“ 貧困の定義はあっても幸せの定義はない ” ことを痛感しました。

山奥にあるゴミ山に行った際には、見たこともないハエの数と臭いを経験しました。しかし、そこにいた子供たちは何も気にせず笑顔で私たちを迎えてくれました。活動で訪れ、交流した子供たちは皆そうでした。夢を持ちキラキラしていて無邪気で気さくな子達ばかりでした。スラムに住む子供たちにボランティアが「ここを出たいと思う？」と聞くと「ここが生まれ育った故郷だからここにいたい」と答えました。



国際ボランティアを通して、日本にある当たり前前は当たり前でないこと、幸せに定義などないこと、良い環境は他人が決めるものではないこと等様々なことを強く感じました。いくら写真で見ても、動画で見ても、実際に見て、感じなければわかりません。私は今回の経験はお金では買えない、一生忘れたくない経験になったなと思っています。

しかし、日本で日本語だけを話していたら踏み出せなかった一歩だと思っています。自分の世界を広げることができたので英語を学んでいてよかったと心から思いました。恵まれた日本にはわからないことが、まだまだたくさんあると私は思います。これからも英語力を高め、世界を知っていきたいと思っています。

英会話プライベート受講 帝京平成大学
齋藤 さん

